

旅—地酒を求めて

— 地方文化との触れ合い —

平間 洋一

(幹候8期)

町には三つの支関があり三つの顔がある。陸の支関は国鉄の駅、その顔は駅前広場、海からの支関は港、その顔は波止場、空からの支関は空港、その顔はロビーである。

三つの支関、三つの顔を同時に持つ町は少ない。普通の町の場合、駅がその町の支関である。この支関には東京、横浜、大阪駅等の近代的だが冷たい顔と、また、その土地柄の溢れる個性豊かな暖かい顔とがあるが、この顔は概して、ひなびたローカル線に多いように思われる。

しかし、一般に余り知られていない顔に海からの顔がある。雪山を戴く小樽・新潟・六甲が港を庄する神戸、桜島を借景とする鹿児島と、この支関に近付くと、まず山が見え、岬続いて灯台、街の景観、そして波止場が見えてくるが、この顔は船乗りにか判からないし、この顔の暖かき、懐かしさは海軍や海上自衛隊に勤務したことのある人にか判らないと思う。波止場には自動車が一面に並び、コンテナの高く積み上げられた横浜・名古屋・広島、材木の積み上げられた新潟・敦賀・舞鶴等の外国を向いた顔があり、四日市・和歌山・徳山等石油コンビナート群の並ぶ近代的顔もある。

さらに、魚の水揚げで活気はあるが、港の入り口から魚の臭いが漂う稚内・八戸・境、また、交通のターミナルとしての機能美人の高松・松山・青森・函館・稚内等があるが、この顔は急激な交通手段の変遷を受け栄華盛衰が速く、年輪の深く刻まれた顔が多いように思われる。

特に、稚内や小樽などは樺太が日本領土であった時には、日本の北への支関として繁栄を極めたが、樺太・千島を失い、日本の非運を表徴するかのように、寂れ疲れ、それでいて、過ぎし日の栄光や華やかさをひそめた顔を残している。

そして、三つ目の近代的な顔、それは空港だ。この顔は、駅と同じく遠くから見えてくるが、この顔を持つている町は広島・福岡・札幌・仙台・秋田・名古屋・鹿児島・松山等意外と少ない。それに、名前は大阪でも京都・神戸と共有の所属不明な顔もあれば、空港が離れた郊外にあるため、まったく、町と無関係な、顔の無い空港もある。

しかし、この顔はやや近代的過ぎて個性に欠ける恨みがある。そのためか、この空からの顔は昼より、概して、夜の顔の方が美しい。

いずれにしても、自動車で行かぬ限りの三つの支関のいずれからか町に入り、町と対面する訳だが、町も人間と同じく、それぞれに、特徴と個性があるように思われる。

しかし、顔は顔であり、駅や港や空港からその町の個性を判断することは出来ない。

い。その街の個性、特徴等を短期間に理解するため、私は出張や寄港の都度、必ずその町の地図を買い、自分の歩いた経路を記入し訪問記念として残してきた。

地図を買ったら自分のいるところ、これから訪問するところ、夜の探索経路を地図上にマークするが、通りの名前や町の名前に、自分の持っている浅い歴史や文学の知識にある地名や記念碑等を発見した時の喜びは大きい。しかし、この楽しみは日本より外国のほうが大きく、また、豊富である。トルコで東郷(平八郎)通、エタアドルで野口(英世)通、パナマでは大平(正芳)通に長野(重雄)ヒルという岡を見つけた時には驚いた。

そして、夜ともなれば、街に出て酒を飲み、その地方の特産物を味わうことにしているが、酒は地酒に限る。地酒はその土地の風土と長い歴史の中から生まれ、育ち、受け継がれてきただけに格別だ。地酒の味は、その土地の料理とも飲んでこそ、その味わいがでるものである。広島ならかき金沢なら甘えび、稚内ならいか、そして秋田ならきりたんぼ、鹿児島なら竹の子料理と、日本とはどうしてこうも食べ物が繊細で豊富なかと感嘆せざるを得ない。

郷土料理を食べながら、その土地の話を聞くこと、これも旅の楽しみの一つだ。このような店に出会えると、旅そのものが充実したものとなるが、残念ながら近ごろ、この種の店が段々と減り、探すのが難しくなってしまった。安価大量販売のチェーン系列化の流れは、全国どこへ行っても

同じような味と、そして値段、合理的かも知れないが情緒がなくなってしまう。そのうえ、どこへ入っても、東京で流行っている演歌をポリウーム一杯に上げ、スター気取りの「カラプロ」の天下、話しなんか出来る雰囲気ではない。

郷土料理が食べられて、地酒が飲め、土地の話しを聞ける店を探すには、全国どこにもある銀座とか千日通り、それにブラザとかいう横文字名の付いた場所と店を避け、川岸とか駅の裏、それに港の近くが良いように思われる。このような店の外観的特徴は、小さいのれんとちようちん、入り口の戸が前後にでなく左右に開き、入口に塩の山がある小さな店であることが条件だ。もちろん、カラオケのないことが絶対条件ではあるが。

それにしても、近ごろ日本酒の売上が減ったそうで、残念なことだ。日本酒を出す場合には、箸おき、小鉢、銚子(徳利)猪口(盃)とテーブルの上には日本文化が並び、地酒・地の料理には、その土地の文化があると言うのに。

日本の男性諸君、日本文化のために、地方文化のために日本酒を、地酒を飲もう。いや、この頃は女性も飲まれるそうで、女性をも含め

『レディ・アンド・ジェントルマン
日本文化・地酒のために乾杯!』と行こうか。